

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷二十四第

行發日一月一年一十和昭

新年特別號

恩給年金賞與の課税	法學博士 神戶正雄
經濟社會學の概念	文學博士 米田庄太郎
費用としての勢力	文學博士 高田保馬
幕末諸藩の開國思想	經濟學博士 本庄榮治郎
經濟學史の基本問題	經濟學博士 石川興二
產蘭處理問題	經濟學博士 八木芳之助
表式調査に就いて	經濟學博士 蜷川虎三
戰前戰後の獨逸社會事業	經濟學士 中川與之助
原料仕入に於ける基本問題	經濟學士 大塚一朗
利潤論の修正	經濟學士 柴田敬
支那の幣制改革と其の意義	經濟學士 松岡孝兒
日本資本主義成立過程の一考察	經濟學士 堀江保藏
中立貨幣に於ける貨幣數量	經濟學士 中谷實
再保險の發展と保險企業結合	經濟學士 佐波宣平
都市と農村との對立に關するアダム・スミスの見解	經濟學士 白衫庄一郎
商業機能學說の發展	經濟學士 堀新一
臺灣の酒專賣	經濟學博士 汐見三郎
國民主義者の私企業觀	經濟學博士 作田莊一
植民地再分配論の種々相に就て	法學博士 山本美越乃
貿易商品の集中性と分散性	經濟學博士 谷口吉彦
我が國の銀行預金	經濟學博士 小島昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題	

(禁 轉 載)

原料仕入に於ける基本問題

大塚 一朗

一 序 言

工業的生産といふ社會經濟的機能の實行を以て中心的業務とする所の企業に於いては、原料仕入 (Einkauf des Materials, Purchasing of Material) と稱せられる資本運動の一分節が、一つの重要な収益力因子 (Rentabilitätsfaktor) を成す。ここに、収益力因子としての原料仕入過程を捉へて、これを其の基本的要素に分析し、更に、収益適合的原料仕入の實現を制約する條件として、一體に如何なる原理的要求が、右の各要素について提出せられるものであるかの問題に就いて、考察しやうと思ふのである。

二 原料仕入の概念

原料といふのは、一般に其の内容が明確に規定されてある所の概念では無い。原料が物財的性質の生産手段の一種であるといふことには、無論異議が無いのであるが、或る物財的性質

1) Cornell, B., Industrial Organization and Management, 1928, p. 210.
Schär, J. F., Allgemeine Handelsbetriebslehre, 4. Aufl. 1921, S. 150.
Bucka, R., Die Praxis des Einkaufs im Industriebetrieb, 1931, S. 17.

從來の通有的概念規定の多くは、次の如き性質に着眼してゐた。即ち、原料といふ物財的生産手段は生産の過程に於いて労働若くは加工作用の對象となりて、新生産物の實質的基礎となる特質を有するものであるといふのである。²⁾此の原料本質觀は畢竟原料の技術的機能に着眼し、これに立脚して形成せられたものである。此の種の原料概念は生産過程の構成を技術的見地に於いて觀察する場合には、有意義のものであるとしても、經營經濟學的觀察の立場から見て、満足し難いものである。私は、ここでは、原料といふ物財的生産手段の概念規定については、次の如き本質的屬性に着眼しやうと思ふのである。それは、原料といふ物財的生産手段が生産過程に參與する場合には、たゞ一回の參與によりてその使用價值及び交換價值が完全に新生産物の上に移轉せしめられるものである、といふことである。故に、同じく物財的生産手段であつても、普通に固定的生産手段と稱せられる範疇に屬する所のもの、即ち土地、建物、機械、器具等々の類や、又普通に補助的材料と稱せられてゐる範疇の動力、燃料、滑油劑等々の類のものは、前述の性質を有せざるものとして、ここに所謂原料の範疇には所屬せざる譯である。

更に、工企業に於ける仕入といふのは、工企業をして、貨幣的交換の機構を通じて、物財的生産手段の對外的調達を可能ならしめる所の、箇別的工業資本運動の一分節的過程の義である。即ち、工業資本は其の本質に制約せられる性質の運動を遂行する爲に、先づ最初の運動段階にて、それに固有の貨幣的形態から、何等かの種類の人的及び物的の生産手段の形態に轉換せしめられ

2) Elbourne, E. T., *Fundamentals of Industrial Administration* 1934, p. 448.
Beckerath, H. V., *Der moderne Industrialismus*, 1930, S. 127.

なければならぬのだが、恰も仕入が人的手段の對外的調達と共に、右の如き工業資本運動の最初の分節的段階を成すのである。繰返して言へば、工業に於ける仕入は、工業的貨幣資本が對外關係に現はれて、物財的生産手段に向つて自らを轉身する過程であり、ここに工業資本運動が最初の策一步を起す譯である。

かくて、最早更めて説くまでも無く、原料仕入は、仕入の一種として貨幣的工業資本が原料といふ生産手段に轉形せしめられ、これによつて原料の對外的調達が可能になる所の過程である。逆にこれを見るならば、たとへ同じく物財的生産手段の貨幣手段的調達であつても、それが固定的生産手段や補助的材料に關するものである限り、それは原料の仕入では無いのである。

原料仕入と稱せられる工業資本運動の一過程が有する所の企業經濟的重要性は、前述せる如きその本質的屬性によつて規定せられるものである。

三 原料仕入過程の分析

原料仕入の本質的屬性は前項に見たるが如きものであるけれども、それが實現する場合に於ける具體的現象形態は、數箇の要素の結合によつて成立するものである。

今、収益力因子として見たる場合の原料仕入過程の具體的構成を分析すれば、結局それは次の如き諸要素に還元される。

策一に、原料仕入の過程は、その實現し得るが爲に、其の前提的條件として必ず、原料の貨幣手段的調達を媒介する所の職能機關の活動を伴ふのである。無論、仕入職能機關の規模及び組織は各箇の工企業について特殊性を有してゐて、決して一律的のものではない。

策二の要素としては、仕入原料の使用價值的品質が指摘せられなければならぬ。原料が、生産過程への唯一回の參與によつて其の使用價值性を完全に新生産物上に移轉せしめ、従つて新生産物の實體の基礎的成分となる性質の物財的生産手段であることは、先に述べたる通りである。原料仕入の過程に於いて、工企業の實質中に攝取せられる對象物は右の如き性質のものであるから、原料の品質は直ちに新生産物の品質及び市價に影響し、且つ原料の使用せられる生産過程の技術的能率に重要な影響を與へ、従つて又、作業費の合理性をも支配する。

第三に、原料仕入は物財的手段の調達の過程として、その具體的形態は、調達對象の數量的規定を含むのである。殊に、原料は生産過程に參與する毎に其の實體を全部新生産物の上に移轉せしめる性質を有するものとして、これが仕入は、工企業の存續中に永く繰返して行はれるものである。故に、一回の仕入に於いて如何なる數量の調達が行はれるかは、企業經濟的關係の上にて、種々の方面に甚だ重要な意義を有す。

第四に、仕入原料の價格は、収益力因子としての原料仕入過程の構成上にて、特に重要な要素である。而して、此の仕入原料の價格といふ要素の企業經濟的重要性は、殊に次の二つの事情に

基いて成立する所のものである。

先づ、原料といふ生産手段は、それが一度生産過程に參與する毎に、其の交換價值を悉く生産物の上に移轉せしめるものであるから、其の仕入價格は、企業内價值運動の上に於いて、其の儘直接に、新生産物の生産費を規定することになる。それ故、屢々、所謂固定的生産手段の價值移轉の處理について行はれ得るが如くに、新生産物の市場價格的状況に順應して生産費負擔關係を調節するといふことは、原料の使用によつて惹起せられる價值移轉の企業内の處理について、許され得ないことである。

次に、指摘せらるべき事情は、新生産物の生産費構成上にて、原料の使用に起因する生産費部分は、生産力の變動によつて其の絶対額に直接の影響を蒙ることが無いことである。即ち、當該生産過程の上に生産力の進歩があつても、新生産物の生産費因子としての原料費部分の絶対額は減少せざる譯である。蓋し、生産力の進歩といふのは勞働及び勞働手段の生産手段的効力増進の義であつて、生産力の進歩があれば、これらの種類の生産手段に基く生産費部分の生産物單位當り絶対額は減少するのであるけれども、原料費の部分の絶対額に、影響の及ぶものではない。然るに、今實際的關係の上にて、工業生産力が益々進歩して行くべきものであることを願れば、工業生産物の生産費構成上にて、原料費の占める部分は相對的に愈々重要性を加へることになる。尤も、一生産物の生産費構成上にて原料費の部分の占める相對的重要性は、固定的生産手段費

及び労働費の部分のそれと逆比關係になつてゐるから、各部分の輕重關係の比較は、生産力の發展といふことの外に、なほ又生産部門の別によつても變動する。工企業内の生産過程に於ける加工の程度が低き場合、或は高度に發達したる自動的機械手段が使用せられる場合等には、生産物の生産費構成上にて原料費の部分が特に重要な地位を占める。單純なる組立作業の行はれる工企業では、生産物費用の構成上にて原料費の占める割合が九五%にも達する例がある。³⁾

砂糖製造、製粉、罐詰等の食料品工業部門でも、原料品價格は生産物原價の八〇%以上に達する。⁴⁾なほ、一般工業を全體的に平均して見ても、原料及び諸材料費が、總生産物價格の五〇%以上に達してゐることは、米國に於ける最近の製造業調査 (Biennial Census of Manufactures) ⁵⁾もこれを語る所である。商工省が我國の工企業の内部的經營狀況の調査として發表したる、部門別的經營狀況統計も、亦同様の事情を報告してゐる。⁶⁾即ち、多數の部門の工企業にて、企業の構造及び生産部門の別に依る差異はあつても、殆んど總ての場合に、原料及び諸材料に基く費用の占める部分が、其の企業の負擔する經費總額の五〇%以上に達する所の、甚だ重要な地位を占めてゐる。

第五に擧ぐべき要素として、仕入金融といふ事項がある。原料仕入は物財的生产手段の貨幣手段的調達の過程であるから、これによつて物財的生产手段が工企業に攝取せられる反面には、必ず當該企業によつて貨幣的手段の對外的流出が行はれなければならぬ。従つて、ここに必要なる

3) Bucka, a. a. O. SS. 16-17.

4) Bucka, a. a. O. S. 17.

5) Balderston, C. C. and others, Management of an Enterprise, 1935, p. 279.

6) Balderston and Others, ibid. p. 280.

7) 商工大臣官房統計課刊、昭和八年及び昭和九年、工業經營狀況調査、各卷

貨幣的手段の調達といふことは、原料仕入過程の構成上にて重要な意味を有する要素である。

四 原料仕入の構成要素に對する合目的性の要求

原料仕入は箇別的工業資本運動の一分節的過程として、其の構成内容が企業の収益目的の實現に適合すべき様のものであることを要求される。そこで、前項に分析せられたる各種構成要素が又従つて、一體としての原料仕入過程の構成に對する合目的性の要求の爲に、其の有り方の上に一定の制約を受けることになるのである。此の際に注意を要する點は、原料仕入過程の各種構成要素が、各箇に單獨に遊離的關係に於いて其の最高合目的性を追求することを許されてゐないことである。換言すれば、各種の構成要素の夫々の合目的性は、互に他の要素との間の牽聯關係に於いて追求せられなければならぬのである。蓋し、各要素の合目的性條件が互に或る程度に矛盾の關係にあるのである。以下に於いて、各箇の要素を別々に取上げて、これに對する合目的性の要求の何たるかを考察する。

五 仕入機關

原料仕入の實現は、必ず、仕入機關の活動に媒介されなければならぬ。従つて、此の仕入機關の組織の外形及び内容の實態が、収益力因子としての原料仕入の一體的合目的性の要求に適合す

るものでなければならぬ。蓋し、仕入機關の組織の實態は一方では、費用の原因として、仕入人件費、仕入店舗の設備費及び仕入機關運轉用消耗品費等の各種の費用の大きさを制約し、⁹⁾他方で又、同じくそれが、仕入對象の價格、品質、數量、支拂手段等の合目的性に大なる影響を與へるのである。

仕入機關の活動に因る費用の節約は、収益力の立場から見ても望まじきものではあるが、其の節約は絶對的節約を意味する所のものであつてはならぬ。それは、此の種の費用が所謂相對費 (relative Kosten)¹⁰⁾の範疇に屬するもので、其の負擔の合目的性は單獨にそれ自體の大きさのみで評定せられ得るものではないからである。即ち、仕入機關費の合目的性は、其の絶對的大きさの外に、其の費用が仕入品の價格、品質、及び其の他の仕入要素の合目的性に對して與へる所の影響の方面をも同時に考慮の中に入れて評定せられなければならぬものである。右の如き相對的立場に於いて見られる限り、仕入機關費の可及的節約が要求される。

仕入機關費の相對的節約性を制約する契機として重要な意義を有する問題としては、(1)仕入職制の專任制か兼任制か、(2)仕入機關の集中制 (Concentration) か分散制 (decentralization) か、(3)仕入機關従業員の人數及び能力、等の如きものが有る。これらの問題の解決は無論一般的、劃一的に行はれ得べきものではなくて、それは、箇々の工企業に於ける原料仕入の規模及び品種、工場の地理的分散状態等の具體的事情に依存して定まるのである。¹¹⁾總じて、仕入機關の組織が組織

9) Hennig, K. W., Betriebswirtschaftslehre der Industrie, 1928, S. 43.

10) Findeisen, F., Organik, 1931, S. 147.

11) edited by Alford, L. P., Cost and Production Handbook, 1934, pp. 344-345.

自體を目的にして存在し、従つて組織の様式として何等か一般に一定せる最善の具體的典型が與へられ得るものの如くに思惟することは、眞實に仕入機關の組織の實態上に合目的性を追求する努力に對して、甚だ大なる障害を與へるものである。¹²⁾

次に仕入機關の組織の合目的性を要求する見地に於いて注意すべき事情として、仕入機關の従業員の能力の問題がある。ここにいふ仕入機關員的能力とは、仕入業務に對する仕入機關員の人的有用性の義であつて、これは一方には、仕入機關の組織が分散制か集中制か、及び仕入従業員の人數が大小孰れかといふ如き組織の外形的性質によつても制約されるのであるけれども、又他方にては、更に一層大なる程度に、従業員の心理的資質によつて影響される。而してこれには(イ)經濟的、精神的關係に於ける従業員の品性の清廉性、(ロ)仕入原料の品質、作業上の用途關係に對する従業員の智識、理解、(ハ)仕入對象の市場に於ける需給關係に對する従業員の智識、(ニ)關係的範圍内の商慣習及び法律制度に對する従業員の智識、(ホ)従業員の道德性殊に責任觀念、(ヘ)賣込商人に對して及び上下同僚間に於ける従業員の交際及び折衝能力等々、の内部的、心理的事情が¹³⁾重要な意義を有す。

六 仕入原料の品質

ここに原料の品質とは、原料が持つ所の使用價値物的性質の義である。此の意味の原料品質が

12) Lewis, H. T., Industrial Purchasing, 1933, p. 20.

13) Bucka, a. a. O. SS. 4-15.

収益力因子としての原料仕入の要素となる場合に於いては、次の三重の關係から其の合目的性を追求される。

第一に、原料は新生産物の實體的基礎を形成するものであるから、原料の品質は直接に新生産物の品質を制約し、新生産物の市場價格も亦従つてこれによつて影響される。第二に、原料品質は生産過程に於ける技術的關係の事情から、生産過程の進行状態に影響を與へるもので、其の爲に、勞働及び機械其の他の勞働手段の生産的有効性が原料の品質に制約されることが大きい。一般に、高度の發達に達せる精巧の自動的機械の有効性は、殊に著しく原料品質の適否によつて増減するものである。¹⁴⁾かくて、原料の品質は生産上の加工的作業費に對して影響を與へる。第三に原料の品質が原料の仕入價格を制約し、惹いては新生産物の總生産費に影響を及ぼす事情は、無論ここに指摘せられなければならぬ。

原料品質の合目的性に對する要求は右の三重關係の考慮の上に立脚する。

一般に言つて、原料品質の最高合目的性といふことは、原料品質を化學的、乃至は物理的見地にて檢察したる場合の最高級性といふことと、必しも一致する所のものではない。¹⁵⁾むしろ、斯の如き見地からの一方的要求に偏する場合に、往々にして、企業經濟の見地からは不必要に高價なる原料の仕入を惹起する危険が生ずる。然れども、生産過程に於ける原料品質の技術的適否を無視して専ら價格低廉化の一方的要求に走るならば、新生産物の品質粗惡化、従つて市場に於ける

14) Beckerath, a. a. O. S. 128.

15) Bucka, a. a. O. S. 47.

新生産物の競争能力の劣弱化の結果が起こるのみならず、なほ生産過程の進行上に障礙が起こつて、不必要に生産作業費の増嵩せしめられる場合が屢々起こる。

殊に、發達したる高速度自動機械の使用せられる場合には、物理的、乃至は化學的見地の上にて優秀性を有してゐて、且つ大量的に齊一性を有する品質の原料が、たとへ單位價格の比較の上で割高でも、結局は生産費の上で相對的節約を齎す場合が少くない¹⁶⁾。ただ、原料品質の合目的性的條件について一般的に妥當する劃一的基準を與へることは不可能で、各箇の企業の夫々の具體的事情によつて其の決定が異なるのである。此の決定の爲の考慮に於いては、豫め定められる新生産物の品質の何たるかが、最も重要な基礎的因子になるのである。尤も、それは單に原料品質と新生産物品質との間の技術的適合關係のみを基礎にして決定せらるべきものではなくて、一定の原料による作業費關係や並びに其の原料の仕入市場關係の上の事情等も亦此の場合の考慮の中に取入れらるべき事項である。

右の事情があるが故に、仕入原料の品質決定の合目的性は、普通には、其の決定職能が所謂仕入係として専門に仕入の職能を司掌する従業員の獨斷専行に一任せられずして、販賣關係職能、作業關係職能、最高管理職能、仕入關係職能等々の夫々の職能を司掌する各主任者の協力的審議に基いて行はれる時に於いて、始めてよくこれを期待することが出来るものである¹⁷⁾。而して、一旦決定せられたる品質の内容はこれを仕入明細書 (Purchasing Specification)¹⁸⁾の上に明確に記入し、且つ仕入先より現品が引渡されたる場合に、現品について嚴密、正確なる検査を行ふことは、最

16) Ellournc, *ibid.*, p. 320.

17) Egbert, J. C., *American Business Practice*, 1931, p. 2572.

18) Lewis, *ibid.*, p. 91-98.

19) Hennig, a. a. O. S. 42.

初の決定を現實仕入の上に維持する爲に必要な處置である。なほ、引渡されたる現品について嚴密なる科學的検査を行ふことは、原料品質に於ける可能的缺點を事前に發見して、實際の作業に入りて後に、原料品質上の缺點に起因して惹起せられることあるべき作業工程の混亂、生産の失敗等による幾多の浪費を未然に防止する作用をなす。²⁰⁾

七 仕入原料の數量

先に述べたる如く、工企業に於ける原料仕入といふ資本運動の分節的過程は其の企業の存續中永く繰返して頻繁に行はれる。故に、各一回の仕入の數量的規模は仕入資金の規模、借入仕入資金の爲の金利負擔、原料貯藏管理費、貯藏中の品崩れ及び値下りの危險、仕入機關費の負擔、作業工程の進行の調和的維持、仕入原料の單位價格等の諸々の方面に對して及ぼすその影響を通じて、収益力因子としての原料仕入の構成上に極めて重要な意義を有するものである。

先づ、生産工程に於ける比較的短期間内の原料需要量を遙に超えて、大量の貯藏手持を惹起する程度に大規模なる一回の原料仕入が行はれる場合には、單に其の數量的關係のみからこれを見れば、仕入の合目的性を毀損する結果が現はれる。此の場合に生ずる不利益の因子の主なるものは、(1)原料の貯藏的手持に起因する休眠資本の發生から惹いて、資本回轉度の減少と過大金融の必要とが起ること、(2)貯藏手持の保管の爲に管理人件費、保險費、貯藏上の固定設備費等の諸種の費用につきて過大負擔が生ずること(3)貯藏中に於ける品崩れ、値下り等の危險が伴ふこと等である。²¹⁾

20) Egbert, *ibid.*, p. 2569.

21) Egbert, *ibid.*, pp. 2565-2567.

Bucka, a. a. O. S. 40.

Cornell, *ibid.*, pp. 238-239.

然れども、又反對に、常に貯藏手持の成立が不可能なる程に一回の仕入數量の規模が極端に縮少される場合には、同じく仕入過程の合目的性が毀損せられる結果を招く。此の際の不利の因子となるものとしては、(1)大量買に對する仕入價格の數量割引(Quantity Discount)の利益を失ふこと、(2)各種の關係に於いて原料の配給手續費が過度に膨脹すること、(3)原料配給過程の上の突發的故障や、乃至は又作業工程に於ける原料需要量が豫定を越えて増加する等の原因に基いて、作業工程の要求に對する原料供給に不足を惹起し、これによつて生産過程の進行を混亂せしめ或は作業の休止を餘儀なくせしめる危険が生ずること、等の事情が其の主要なるものである。²²⁾

以上に見たる所の如く、原料仕入の數量的規模は、大小孰れに偏する場合にも、仕入過程の合目的性を毀損する原因たる不利益の因子を含むものであるから、これについては、過大或は過小に陥ることなく、最も有利なる仕入數量(Most Economically Sized Purchase)²³⁾の決定が要求されなければならぬ。此の要求に關しては、恣意的決定を除く目的の爲に、種々なる數學的等式制が案出されてゐる。²⁴⁾しかし、これらの等式制は決して實際の場合の具體的事情に對して弾力性を有するものではないのだから、これに拘泥することは、反つて又一層大なる恣意に陥る危険がある。²⁵⁾故に、各箇の實際の場合に於ける最も有利なる仕入數量の規模の決定は、其の決定の場合に於いて、先づ最初に、生産過程に於ける原料需要量の豫定²⁶⁾と、並に其の決定當時の原料市價の先行見込とに第一に着眼して、併せて、當時の財産内容に於ける資金状態を參照し、これを前提として、先に述べたる大口仕入と小口仕入との各種の利害、得失に就き精細なる評價を遂げて

22) Cornell, *ibid.*, pp. 240-241.

23) Lewis, *ibid.*, pp. 158-164.

24) Manufacturing Industrys, March, 1927, pp. 199-203, (by pennington, G.)
Eidmann, F. L., *Economic control of Engineering and Manufacturing*, 1931,
pp. 99-111.

25) Lewis, *ibid.*, p. 164

始めて行はれ得べきものである。此の場合に注意を要する點は、生産過程に於ける原料需要が急激に豫定以上の數量に増加したり、或は原料の配給過程に突發的故障が起りて、作業工程に對する原料供給に不足を惹起する危険を豫防する爲に、常に非常の準備としての最小恒同手持(Eiserne Mindestbestand)²⁸⁾の形成に對する要求が、又一つ仕入數量の決定を制約する因子たることである。

なほ、一般的にいへば、極端に大なる貯藏手持を造る程度の大量仕入は、たとへ仕入價格の上
に數量割引の利益を得ても、其の利得によつて、一方に過大の貯藏手持から惹起せられたる各種の不利益を償ひ得るに至るといふことは殆んど不可能のことに屬する。²⁹⁾そこで、大量仕入の場合に伴ふ所の、價格に對する數量割引の利益を納めて、而も他方に貯藏手持より生ずる不利益を免れ得べき方法が要求せられることになる。(1)一箇の工企業に屬する多數工場の原料仕入を統一する仕入の集中制、(2)多數の企業間に於ける原料仕入の協同的集中制、³⁰⁾(3)特定の仕入先との間に於ける長期購入契約制(Long-Term Contracts)、³¹⁾(4)原料品種の規劃の統一化等³²⁾は右の要求の目的に適合するものである。

七 仕入原料の價格

仕入原料の價格は、其の儘直接に新生産物に移轉されて、その原價を構成する要素になるのであるから、仕入原料の價格が比較的に低廉なる程益々新生産物の原價は引下げられることにな

26) Rowland, F. H., How to Budget for Profit, 1933, p. 215.
27) Balderston, C. C., *ibid.*, p. 291.
28) Nicklisch, H., Die Betriebswirtschaft, 7. Aufl. SS. 452-453.
29) Egbert, *ibid.*, p. 1581.
30) Findeisen, a. a. O. S. 152 ff.

り、従つて仕入の合目的性が高められる譯である。しかし、仕入價格の比較的低廉といふことが眞實のものであるが爲には、一方に於いて、其の廉價といふことの反面にて、豫期せざる品質上の缺點や或は又引渡履行の不正確といふが如き犠牲の附隨せざることを要求される³¹⁾。

右の如き犠牲が除かれる限り、仕入價格の低廉は仕入過程の合目的性に對する重要な要件であるのだから、仕入價格については、その可能的低廉が追求される譯である。しかし、このことは仕入價格の無條件的な低廉化が追求せられるといふことを意味する所のものではない。ここに追求せられる原料價格の低廉化といふことは、先づ新生産物についてその可能的販賣價格の豫定的見積を立て、これを基準にして逆に合理的原價を算定し³²⁾ここに明かにせられる原料價格の可能的最高値を基礎に取りて、これより以下にて少しでも競争企業の仕入價格を下廻る仕入價格が維持せられるやうになることを意味してゐる³⁴⁾。

尤も、現代の工企業は、一般にそれに特有なる設備の性質に制約されて、大なる割合の不變費を負擔しており、且つ更に其の設備が弾力性に乏くて従業部門の轉換が極めて困難であるといふ特殊の事情を伴つてゐる爲に、原料仕入價格の算定にも、屢々右の原則を維持し難きことがある。それは、新生産物販賣市場が不況にして價格が低下し、原料費を含む所の生産原價にて其の販賣が行はれざる際に於いても、なほ仕入を實行して生産及び販賣を繼續し、これによつて何程にても不變費の負擔を回復する方法に出づることの方が、原料の仕入を停止し、従つて生産、販賣を休止するか、或は又固定設備を賣却する方法に出づることよりも、一層収益力の要求に

- 31) Balderst n. ibid., p. 292. Stephenson, J., Principles of Business Economics, 1934, p. 297.
32) Hennig, a. a. O. S. 42.
33) Bucka, a. a. O. S. 27. Egbert, ibid., p. 2535.
34) Bucka, a. a. O. S. 22.

適合する場合が屢々起ることを意味してゐる。³⁵⁾

なほ、原料仕入價格の眞實なる高きは、單純に、賣買契約の表面に示されてゐる名目的價格表示のみを基礎にして評定し得られるものではない。それについては、其の他になほ多くの關聯的事項を綜合的に考慮しなければならぬのである。此の場合に、就中重要な事項としては、代金支拂期限、支拂手段の性質、外貨建の場合の爲替關係、賣手との間の相互取引關係、運送費、保險費、契約數量の大小、引渡期限の正確性等の事項を擧げなければならぬ。³⁶⁾

仕入價格の低廉化實現を促進する積極的方法としては、次の如き仕入方法が殊に重要な意義を有す。(1)有能なる仕入機關の設置及び其の活用、(2)多數企業間或は一企業内各工場間の仕入の集中、(3)一定の種類の原料の價格が、高度に正確なる回歸性を以て年中の一定季節に比較的低位を現はす場合に、其の季節に於いて、當座の需要の外に、他の高値季節の需要をも併せて、取越的買溜め(Advancing Buying)³⁷⁾を行ふこと、(4)生産物の販賣關係が相當長き將來の時間に互りて安定せる見透しある場合に於いて、價格を特定し、又は特定せずして、原料の長期購入契約を締結すること、³⁸⁾(5)既に相當期間の先物について生産物の販賣契約が成立してゐる場合に、原料市場の比較的低値に於いて、既に販賣契約の成れる先物生産物に對する原料の一時的買手當を行ふこと、³⁹⁾(6)生産物の販賣が確定せざる場合に、高度の客觀的蓋然性を有せざる將來の原料市價昂騰を豫想して、當座の必要量を越えたる大量の見込仕入を行ふ所の所謂投機的仕入を行ふこと、⁴⁰⁾(7)原料市價の先高見込にて先物買をしたる場合に、豫想を裏切る價格の低落にて割高仕入となる危険

35) Lewis, *ibid.*, p. 231-232. Findeisen, a. a. O. S. 141.
拙譯、經營經濟學總論、昭和八年、151-152頁
36) Findeisen, a. a. O. SS. 142-143.
Bucka, a. a. O. S. 31.
37) Egbert, *ibid.*, p. 2543.
38) Balderston, *ibid.*, p. 292. Lewis, *ibid.*, p. 278.

を豫防する爲に賣繼⁴¹⁾ (Hedging) を行ふこと。

八 仕入金融

ここに仕入金融といふのは、仕入對象の對價たる支拂手段を調達することの義である。⁴²⁾ 此の意味の仕入金融は、(1)支拂手段の種類の選擇、(2)支拂義務と支拂手段の準備との間の調和關係の維持といふ二つの點から、仕入の合目的性を制約する作用をなす。

支拂手段の種類には所有關係の上から見て、自己資金と借入資金との二種がある。借入資金には又賣手より與へられる無形式信用と賣手其の他よりの各種手形制信用とがあつて、普通に用ゐられてゐるものである。

支拂に對する自己資金と借入資金との選擇は、箇々の企業の其の時々⁴³⁾に於ける財産内容の構造状態によつて根本的に制約される。自己資金が豊富に現存してゐて、財産内容の緊張度が低級なる場合には、無論其の資金を以て原料仕入に充當して、財産内容の緊張度を高めることが合理的なる處理である。又、賣手より借入資金を得ること、即ち信用買の方法による時は其の原料價格に對する影響が考察されなければならぬ。又借入資金によつて仕入の行はれたる場合には、借入形式の如何に不拘、辨濟期限迄に、生産物の賣上げ其の他の方法にて確實に辨濟能力を準備しておかねばならぬ。殊に、賣手から融通を受けてゐた場合には、其の期限を確守すると否によつ

- 39) Ryan, J. and Taylor, J., Standard Cost Control for Cottonspinning, Manchester, p. 7.
40) Findeisen, a. a. O. S. 138. Egbert. *ibid.*, p. 2544. Balderston, *ibid.*, p. 294. Lewis, *ibid.*, Chapt. 9.
41) Balderston, *ibid.*, p. 295. Lewis, *ibid.*, pd. 296-301.
42) Findeisen, a. a. O. S. 158.

て仕入價格の上に大なる影響を與へられることが多い。かくて、時としては手持財産殊に生産物を原價以下に賣却してもこれによつて辨濟手段を準備することが、一層合目的なる場合もある。

なほ、投機的仕入の爲の支拂手段としては自己資金を選択することが原則として合目的の處置である。蓋し、これによつて、たとへ投機的豫想の失敗したる場合に於いても、投機的仕入關係以外の範圍に至るまでも財産内容を破壊せられることの危険を免れることが出来る。

原料仕入より起る支拂義務とこれに對する支拂手段の準備との間の調和を維持する爲には、次の如き方法が有效な作用をなす。即ち、現實の仕入の實行に先立ちて、(1)原料仕入の爲に各月に割當てられる支拂義務負擔の豫定額、(2)各月の支拂豫算(現金支拂及び信用支拂に區別して)の二つの項目について事前的計劃表を作成し、此の計劃に準據して實際の仕入を行ひ、且つ支拂手段の現實的支出状態を計劃表の内容と對照し、常に仕入金融状態の統制を確保することである。⁴³⁾

九 結 言

此の小篇は工企業に於ける收益適合的原料仕入の前提的條件たるべき内部的要求の何たるかを原理的立場の上から探求したるものである。實際の原料仕入に於いてこれらの原理的要求が充足せられ得る爲に、右の夫々の要求に對して、又適當なる手續的手段が施設されなければならぬ。此の手續的手段について論ずることは、これを別の機會に譲るのである。

43) Findeisen, a. a. O. S. 158.

44) Hennig, a. a. SS. O. 43-44.